



洞海湾 洞海湾のむこうには本州下関が見える(写真右方面)

美しいチラシが出来ました。これについては、当日の念ごあんないの折、話題にしたいと存じます。ここでは能「砧」についての思いつくまま、をつづつてみたいと思います。

美しいものには謎がある。「砧」もまたたくさん謎を抱え込んだ作品で、その研究的な解明の現段階については天野文雄先生の御論をお読みいただくことにいたしました。ごく一般的な観客としてこの能に感じる謎、その第一は、この作品の主題は何かということ。男の不実が女を絶望的に追い詰め死に至らしめる、というストーリーですが、男の不実といってもどうも女の二方的な思い過ごしであったようで、もう半年、あるいは一年待てば、めでたくもとの鞘におさまったのに、と現代の能気な観客には思えてしまう。ではこの女の死は短絡的で悲観主義的なミステイクだったのでしょうか。「砧」の能をみると、この能が訴えようとしたものは、どうもそうした現代的な現実的な常識的感覚の、向こう側にあると思わせられる。そこに謎のようにあるもの。それが実はこの作品の主題なのではないでしょうか。謎が主題であるということ。つまり、この女の男への恋情は現代のわれわれにとって、かつ、世俗にずぶりと生きてくる末世の人間にとっては解き難い感覚なのだ、ということ



「砧」の舞台芦屋（写真左方面）

北九州市八幡東区 皿倉山山頂よりの眺望

でしょう。作者世阿弥の言い残した「かやうの能の味はひは、未の世に知る人あるまじ」の真意はこのことではなかったかと思われまふ。この女の男への恋情には百人が百様の解釈可能であり、同時にまったく正解を出すことは不可能なのだ、という世阿弥の冷徹な遺言。そこに、人の思いは永遠にすれ違うという悲劇をよむことも許され、また、世阿弥その人の絶望的な疎外感をよみとることもできましよう。詩的表現を幾重にも折り重ねて、女の恋情に仮託しつつ、世阿弥がうたおうとしたものを今日は今日の思いの中で聞き取るほかはないのかもしれない。

第二に砧です。砧の、このストーリーにおける役割の謎。「唐土に蘇武といつし者」の物語はたしかにこの場の心象風景を魅力的に広げていますが、むしろそれ以上に、「ここには打たるべきものとしての衣が「葵上」の小袖と同じように必要だったのではないか」と思われます。うら若い乙女である松風は去つて帰らぬ恋人の烏帽子狩衣を抱きしめますが、年下の恋人へのやむことのない嫉妬に駆られた六条御息所は恋人の妻を杖で打ち据えます。古演出では登場した侍女ともどもに、「砧」でもまたシテとツレがふたりで砧を打つ。年たけた女のせきかねる思いが、打つという行動を取らせたことは偶然ではないでしょう。金剛流の砧の作物が他流に比べ異様に美しいことも、さらなる深読みを誘っているようでもあります。

第三に後場の女の亡霊です。亡霊は「葵上」のように巫女による梓弓の鳴弦によつて出現します。その出現のさまが謎なのです。

能では橋掛を杖をつきつつ歩いてくる。つまり彼女はひとりきりでこの世の光景の中に戻されて来る、と理解されています。が、そうなのか。詞章では実は地獄そのものも梓弓の力で引き寄せられているとよめるのです。黄泉の国のイザナミのように衰え果てた自分を夫の前に恥じるだけでなく、もともとも醜悪凄惨な今を夫にみせねばならない苦しみ。シテの清らかな装束と静かな動きの背後に暗い血みどろの地獄の情景がうたわれている。目と耳と、そのアンビバレンスに引き裂かれることがあるいは能を観るということなのかもしれません。後場で、亡霊が男をきくと見据えるところはそのあまりのはげしさでこの能のクライマックスともいえる場面です。

そして梓弓という謎。死者を呼び寄せ、地獄の扉を開く呪具。言葉の縁によつてもうひとつの世界を呼び込むという能の手法を梓弓は象徴しているようにもおもわれます。能は舞台にほとんど何も出さず、都を、唐土を、九州芦屋を、そして地獄まで出現させる。梓弓のように、ことばという呪具を用いて。「法華読誦の力にて」亡霊が成仏するなどなんと不可解な、と思うのは現代のわれわれの浅知恵で、このような秘儀も成就させるのがことばの霊力、能の呪力なのだと思得させられることが、また能を観る喜びなのだと思えます。

「恋ひつゝや妹がうつらんからころも

きぬたの音のそらになるまで」(藤原公実「千載集」)

「ちたびうつ砧のをとに夢さめて

ものおもふ袖の露ぞくだくる」(式子内親王「新古今集」)

先行の名歌は砧の哀音を伝えていきます。ことに能「定家」でわれわれに親しい式子内親王の悲歌のなんとという艶。下つて芭蕉には「きぬたうちて我にきかせよ坊がつま」の句。芭蕉よりさらに下つて、上田秋成は「浅茅が宿」(「雨月物語」)に「砧」の主題と情趣を巧みに借用してあります。先行の最上質の作品世界と気脈を通じつつ、後代の長きにわたつて上質の創作の意欲を刺激してやまない作品、それが詩劇の名作「砧」という能なのでしょう。